

胎児経験

勝部 真長

育児の「教科書」大幅改訂

妊娠婦に配られる母子健康手帳というものがある。それと一緒に育児の副読本『赤ちゃん——そのしあわせのために』というのが配られて育児の教科書とされてきたのが、この四月配本分から二十一年ぶりに全面的に書き改められた。というニュースが二月六日付の朝日新聞にのっていた。それによると近年の医学、心理学などの進歩で、育児についての考え方方が大きく変化してきたという。

これまでには「赤ちゃんは、はじめからひとりで寝かせましょう。添い寝は、お互いに寝にくいだけでなく、赤ちゃんを窒息させる危険もあります」と否定的であった「添い寝」

新版では、「添い寝は母と子のスキンシップの機会にもなるのでよい」とですが、首がすわる前の赤ちゃんの場合、お母さんがうつかり寝込むと、赤ちゃんの窒息事故につながることもありますので十分気をつけて下さい」となって、基本的には添い寝を勧めている。

つまりスキンシップの大切さが強調され、また母乳栄養が牛乳、粉ミルクよりもまさっていることが見直されてきている。

核家族の時代になると、「おばあちゃんの智恵袋」をたよりにする」ともできないので、若い母親がもっぱらたよりにするのは育児書であった。それも大ていは「○○博士の育児書」といったたぐいのアメリカの学者の説をそのまま受け入れて、日本の子どもの育児に当てはめているのが一般的な大勢であった。

ところがアメリカと日本とでは社会構造が違うし、家庭の人間関係も違う。アメリカはなんといっても個人主義が原理としてあって、ひとりひとりの自我の粒が立っていて、夫婦、親類でも、個人として一対一で距離をおくのが、その基本的な生き方である。

これにたいしてわが国の社会構造は、土居健郎教授の指摘したように「甘えの構造」なのである。「甘えの構造」とは、そのアメリカで出た英訳が示すように“Anatomy of Dependence”（依頼心の解剖学）なのだ。甘えとは、依頼心、依存心のことである。これにたいして、アメリカ人の心性は Independence（独立心、独立不羈）である。

その独立心を育てるには、赤ん坊のうわからひとり籠に入れて寝かせ、時間をきめて授

乳したり、おむつをかえたりする以外は、一室に閉じこめてドアをしめ、泣こうがわめこうが一切構つけないで放っておくことが、良い育て方であるというので、隔離方式がとられてきていた。それをそつくり良いことと思い込んでまねてきたのが、戦後四十年のわが国のインテリ女性の育児の仕方であった。

ところが本家のアメリカで、育児理論に変化が起ったらしい。少なくとも乳幼児の時期、〇歳から三歳までは、ハグ（抱く）することが大切で、抱きしめることによつて赤ちゃんのなかに、母親（たいていは人間一般）にたいする信頼感がわき、情緒の安定がえられるのだ、というエリック・エリクソンらの考え方が主流をしめてきて、先年、国際児童年で名古屋にきて話をしたスポーツ博士なども「私は三度、学説を変えました」と告白したそうである。

そうなると従来、わが国で伝統的な育児法としてやつてきた抱っこやおんぶや添い寝のほうが、理にかなつていたということになる。

母親から一定の車間距離をおいて、冷たく育てられ、抱いてもらえずに育つた子どもは、ついに満足に抱かれたことがないという怨念を秘めたまま、大きくなり、両親にたいして不信感をもち、情緒不安がいつまでも抜けない。いわゆる白けた心のままで思春期を迎える。こういう子どもは、非行や家庭内暴力や登校拒否に走りやすいともいわれる。

刷り込み理論

この頃の産婦人科病院では、赤ん坊が産まれるとすぐに母親のところへ持ってきて、抱かせたり手に触れさせたりするようになってきた。以前は赤ん坊を母親からひき離して、しばらく預って、きれいに洗つたりふいたりしてから産婦に対面させるというやり方で、対面するまでに少し時間がかかったものなのに、そうでなくなつたのは、やはり新しい理論が背景にあるからだと思われる。

オーストリーの比較行動学者で、マックス・プランク研究所にもいた、ノーベル賞受賞者のコンラート・ローレンツ博士は、自邸でたくさんの動物を飼つて観察、研究しているので有名である。彼の研究に刷り込み理論というのがある。アヒルとかガチヨウのヒナが生まれると、すぐに母鳥からひき離して、玩具のゼンマイ仕掛けのセルロイド製の母鳥らしきものを動かしてみせると、ヒナは一所懸命になつてその動くオモチャのあとを追いかけ、ついて廻るというのである。しばらくそうしておくと、それが癖になつて、今度は本当の母鳥をつれてきても見向きもしないそ�である。つまり赤ん坊は、この世で一番最初に接したものに愛着を覚え、それにひかれる。インプリンティングが行われる。刷り込まれるのである。

生れたばかりの赤ちゃんの扱い方が、一生を方向づけるといって言ひ過ぎではない。京都大学の園原太郎氏らの研究によれば、生まれて三、四日目の赤ちゃんが、両手、両足

を大きく開いて、それを次に両手を合掌するように合わせて、両足も合せるようしなぐきをするそうである。また一週間か十日目ぐらいで、小さな口をほころばせ、いかにもスマイル（微笑する）の恰好をしてみせる。よく見ると仏像の柔軟な笑顔にそっくりに見えるそうである。

赤ちゃんは、人間として何でも解っているのではないかと思われる。ただ口に出して言えないだけで、その無意識の領域ではすべてを感受しているのではないかと思われる。

胎児経験

すでに胎児として母のおなかにいる時、外界で音楽レコードをかけていると、それに耳を傾けていたのが、レントゲン撮影で知られる。そして生まれてから、その赤ちゃんが泣いている時に、先刻の音楽レコードを聞かせてやると、とたんに泣きやむそつである。つまりなんらかの記憶があるのである。

そこで私が思うのに、胎内にいる時が、人間にとっては、パラダイス（楽園）として記憶に残り、一番安楽なのしい時期として心に刻まれているのであるまい。なぜなら、胎児は飢えるという心配がない。たえず臍の緒を通じて母の血液が流れこんでくるのであるから、点滴をうけているように栄養は満足させられているのである。第二に、胎内では羊水に囲まれて、一定の温度を保っているのであるから、暑さ寒さの心配というものがない。こんな安楽な状況というもの、安心しきっていられることは、一たん外界にとび出し

てしまうと一度とえられないものである。

この婆婆に出でてしまふと、つねにひもじい思いをしなければならない。子どものことをガキ（餓鬼）というが、いつもおなかをすかしてオッパイを求めて泣いているのである。また暑さ寒さという外界の気温に適応しなければならないのも、赤ん坊にとつても苦労であつて、少し厚着をさせれば鼻のアタマに汗をかき、少し蒲団を薄くしてやれば、すぐ風邪をひく。そういう意味で、この世は苦の世界なのである。

とくに胎内でくるまれて周囲をしつかり囲まっていた、あの安定感、安心感にひきかえ、この世に放り出され、ひとりぼっちでいることの不安感、頬りなさ、心もとなさは格別のものであろう。だからこそ赤ちゃんにかぎらず子どもは、つねにスッポリと抱かれたく思い、くるまれたく思い、「抱っこ」「おんぶ」を求めてやまないのである。

成人になつた私自身を顧みても、やはり夜になつて自分の蒲団にもぐり込み、手足を伸ばした時の安心感、くつろぎといふものは格別のものに感じられる。昼間、外界にいる時の警戒心や防衛機制がはずれて、非常にリラックスし、自律神経もゆるむ思いである。さらに風呂や温泉につかつたときの、あの伸び伸びした「ヤレヤレ」といった快感はなんだろう。一定の温度の水につかつて神経のほぐれた状態での浮遊した感覚は、もしかすると羊水のなかに浮んでいたときの胎児経験を想い起しているのではないだろうか。

だから子どもと一緒に風呂に入つて、お互に警戒心をなくした、素直な状況でのコミュニケーションは、教育的に意味のあることなのである。戦前のわが国には錢湯がいたる

ところにあった。風呂での裸のつきあいは、地域のコミュニケーションを深め、地域社会が今ほどトゲトゲしくなく、和気藹々としていた。アメリカには、新興宗教が盛んであるが、とくにカリフォルニア州にそれが多い。近頃、ロスアンゼルスあたりの新興宗教の写真に、大きなタライのような湯船に、四人または六人の男女が混浴している風景が映されている。これも孤独な個人主義を克服するための一つの方法なのであらう。

以上のべたことは、〇歳から三歳までの乳幼児にとって抱擁ということが欠くべからざる人間形成の手続きであり、人間的信頼の現であるということを強調したかったのであるが、考えてみれば、子どもだけでない。われわれ成人もまた抱擁なくして生きられないのである。抱かれたい、抱いてほしいということは、人間の痛切なる願望である。

そしてその願望は、実は胎児経験への追憶なのでないか、というのが私の推測なのである。

(お茶の水女子大学名誉教授)